

## 第一章 切っ掛け

こんにちは。

僕は近藤侑司、いわゆる地方都市にある楽器店で営業と配送と雑用を担当してる 28 歳。

いきなりなんだよって思っているかもしれないんだけど、同じ年で結婚 3 年目になる僕の嫁の話なんだ。

この話、誰にも話せないし書きたい気持ちを抑えきれないので、小説にして吐き出すことにした。

嫁の名前は友美。近藤友美という。

友美は車で 10 分ほどの隣町にある、田舎ではよくある巨大ショッピングモールの中で、大手アパレルの小さな直営店に勤めている。

この物語の切っ掛けなんだけど、嫁の働くショップの少し奥のほうに自動車ディーラーのショールームがあって、そこに勤めるスーツ姿の若い男が、いつも友美の店の前を通っていくようだ。その時必ず笑顔で手を振って来てたそうなんだ。

それで友美も同僚の恵理那も、最初は車を売するためのきっかけ作りだと思いながらも、ふざけ半分で手を振り返していたんだってさ。

しかし、いつの間にかその男性は毎日店の前を通るだけでなく、朝昼晩と頻繁に顔を見せるようになり、直接話しかけてくるようになってきた。そしてついに「車のことなら何でも相談して」と名刺を渡してきた。名刺には「〇〇自動車販売 営業係 黒崎賢」、携帯番号、LINE の QR コード、特技としてアイスホッケーとサッカーが記載されていた。

友美が話すには、大学時代までアイスホッケーの選手として活躍していたらしく、音楽一筋の僕とは正反対のタイプ。友美の第一印象では「背は低いけどガタイのいいマッちょ」だったらしい。

僕はその話を聞き、「そろそろ車検が近いんだから、同じメーカーだし頼んでみたら？」と上から目線で友美に言ってしまった。見知らぬ男に話しかけられるのは妙な感覚だったが、田舎の地味なショップ店員の彼女が、他人から「いい女」として評価されているようで、なんだか嬉しかったのだ。

友美は 1995 年 9 月 8 日生まれ。身長 170cm、体重 53kg。スリーサイズは下着のタグをこっそり見たんだけど、B85、W59、H89 数字だけ見ても、なかなかのスタイルだと思う。

あだ名は「近藤」「ともみ」「ともみさん」など自由。焼き芋が大好きなので僕は出会って間もなくのころから「いも姉さん」って呼ぶ時もある。

これは余談なのだが、仲の良い友達とみんなでキャンプに行くときに、道中に寄ったお肉屋さんで、『石焼きいも』が売ってたので、うちのいも姉さんにと買ったところ、その「いも姉さん」というフレーズがみんなに受けて、B B Qの時に美味しそうに頬張る友美に直接「いも姉さん可愛いよ」って茶化した愚か者がいたんだよ。それで友美が膨れてしまってさ、「誰が言ってた？そんなこと言うの侑司しかないだろ」って。それから「イモ姉」というダサいあだ名が浸透してしまったんだw

顔は某女性デュオの片方に似ていると黒崎くんが言っていたそうだ。

僕は若い頃の公共放送の清楚系アナウンサーに雰囲気似ていると思っている。

性格は優しく押しに弱い、少し気が強い不思議なお姉さんタイプ。なぜか背の低い

男性に好かれる傾向があり、黒崎も友美より背が低いらしい。

車検のお話に戻るが、友美も「安ければお願いしてみようかな」と言い、僕は「それがいい、男なんて使ってナンボだよ」と偉そうに返した。

新年度の4月になり、友美はさっそく黒崎のお店に車検の相談をするため、LINEで連絡していた。

黒崎の名前を出すたび、友美の声が弾む。目が細くなって、うきうきとした笑顔になるのがはっきり分かった。友美の車は、D社のあの可愛らしい軽四だ。5年落ちで走行5万キロ。ずぼらな友美は洗車などほとんどしないので、綺麗に保っているのは、ほぼ僕の手によるものだ。

その状態を黒崎に見てほしいというので、友美は仕事の合間にショッピングモールの職員駐車場で軽く車を見せることになった。不具合はなく、タイヤの溝もまだ十分。点検整備にオイル交換、エレメント交換はサービスだという。

そして黒崎は、にこやかにこう言ったそうだ。「近藤さんとのお近づきの印に、おまけしまりますよ！」

「でもこの値段、他の人には絶対言わないでくださいね、僕店長に叱られてしまいますから……あと、僕が洗車と車内清掃をしますので、全てコミコミ 6 万円はどうですか？」

友美は車のことなど全く無頓着で、これまでディーラーに行けばお嬢様扱い、気づけばフルセットの高額コースにされてきた。なのに今回は、黒崎が自ら洗車までしてくれるという。

田舎のカーディーラーにしては、破格に安すぎる。

最近の友美は黒崎の話ばかりする。「黒崎くん、背は低いけどガタイいいよね。大学ま

でアイスホッケーやってたんだって」友美がそう言ったとき、声が少し弾んでいた。

僕は友美が他の男と仲良くしている話とかを聞くと、悶々ムラムラしてくるような感じが不思議でたまらなかった。

そしてそれがドキドキしながらも何故か心地よいのである。

この言葉で表すことのできない感覚がどういうことなのかまだ知る由もなかった。

そして今日、今度は同僚の恵理那の車検が近いと聞き、珍しく唇を尖らせた。

「恵理那も車検だって。私が黒崎くんと話し始めたら恵理那も急に仲良くなってさ、なんか騒いでるみたい……」恵理那は友美より3つほど年下の同僚だ。

派手なお姉さん系で、夜はお水のバイトをしている。スタイルが良く、都会のカリスマ店員のような雰囲気をもっている。

人は良いのだが、恵理那の夜のお客さんが恵理那を目当てに、ふと店に立ち寄り友美を見かけて「恵理那よりあの子の方が可愛いから紹介してよ」と友美の目の前で恵理那本人に言って激怒したというのがきっかけで、なぜか友美に対して妙なライバル心

を燃やすようになったらしい。

恵理那と友美は同じ中陽産業という大手アパレルの会社の人間だが、友美はプロパーの社員で恵理那はアルバイトから契約社員になった子である。

友美は年下の恵理那を妹のように可愛がって面倒を見ているのだが、恵理那は男のこ  
とだけは負けたくないというプライドと闘志をむき出しにしてくる女みたいだ。

恵理那は夜の仕事をしているだけあって派手な格好がよく似合う、艶やかな唇と目元を持ち、笑うと危うい色気がにじみ出る。友美とは全く違うジャンルの女だ。華やかで大胆で、どこか恐ろしいほどに生き生きとしている。それに対してうちの友美はおとなしくて何事にも無頓着なお嬢様肌。

それから数日後、友美の車検の日になった。

友美は休みを取って車を黒崎のお店に置きに行き、

帰りは足がないので僕が「迎えに行くよ」と言ったら、

「今日は黒崎さんが送ってくれるって言ってたから、気にしないで仕事しておいで」

って即却下されてしまった。

友美は嬉しそうな目をしていたような気がした。それがまた心と股間を熱くする感じがするのだ。

その日の晩、仕事を終えて家に帰ると友美は嬉しそうに僕の晩御飯をこしらえてた。

大きなジャガイモの入ったホッキカレーだ。

僕は自他ともに認める偏食家で好きなものしか食べないのだが、友美にはいつも世話になっているので、マヨネーズ以外はなんでも無理して食べている。

ご飯を食べながら車検の話になって、友美は「黒崎くんがね、車検に車届けたらお昼のランチをご馳走してくれてさ、そのあと黒崎くんのお客さんだというガス屋さんの展示会に寄って、そこの社長夫人の麻由子さんが黒崎君をお気に入りにしていて、お洋服が好きだからと紹介もこめて立ち寄ってくれたの」

「それで麻由子さんが、じゃがいも詰め放題の担当で、まるでわたしのお母さんのように、じゃがいもを段ボールにいっぱい詰めてくれたのよ。いっぱい持って帰りな



さいって」

僕は「さすが、いも姉さん！良かったじゃないか！」と友美を罵るのだが、友美は「その言い方いいもんじゃねーよ！」とダジャレで返してきた。割とオッサン臭いところも時々出る友美であった。

本当は黒崎とデートした事を、さもデートじゃないけどガス屋さんの展示会とか適当な理由付けて、一緒にウロウロしたってわざわざ申告してくる友美。なんか変な気分だが人妻が車屋といえど二人っきりでデートした事に、僕の股間がわけのわからない感覚と共に妙に興奮して眠れなかった。

## 第二章 性癖に気づく

車検も終わり、5月になっても友美と黒崎との距離はどんどん縮まってきている。

僕もなんか少しだけ、いや大いに焦ってきたのだが、ここは男のプライドってものが僕にもあった。

寛大を装いつつ友美にこう聞いてみた。「黒崎ってやつはお前に気があるんじゃないの？」

友美は「あはは、そんなことあるわけないでしょ、黒崎くんが狙ってるのは私なんかじゃなくて絶対に恵理那だよ」

「いつも恵理那の話するし、お店来ても私より恵理那とばかりしゃべってるんだよ」「だからカラオケもボウリングもゴルフもすべて恵理那付きなの前にも話した通りでしょ！」恵理那に嫉妬しているのか、それとも隠し事があるのかわからないが少し友美がむっとした顔をしている。

僕は、友美がよその男が下心満開で近づいているときになんか性的な興奮を覚えることは確かにあったのだが、黒崎との件でそれがはっきりとした。でも心が賢者の時は興奮するどころか友美が取られてしまうのではないだろうかと思いの方が大きくなっ

て心がどうにかなりそうになる。

そんな中で黒崎と出来てしまっただけで帰ってこなくなるのではないかという不安と、もしかしたら友美が僕の聞いたこともないエッチな声を出してムフフな事しているんじゃないかという期待の混濁に耐えられなくなり、僕は小細工を試みることにした。

すぐに僕は、友美のトートバッグにボイスレコーダーを仕込めないかと考えた。うちの妻が仕事でもプライベートでも毎日持ち歩いているのは、店のオリジナルのトートバッグだ。

友美のいつも持ち歩いているトートバッグは見た目もおしゃれで作りも丈夫、大手アパレルの製品だけのことはある。

そのお気に入りのトートバッグにちょっとした仕掛けをすることにした。

翌朝5時。友美は遅番なので昼出勤。この時間は友美の爆睡の時間なので、何をするにも一番安全な時間帯なのだ。

早速作戦開始だ！

自分の妻と言えど、女性のバッグにボイスレコーダーを仕掛けるなんて僕はどうかしているという気持ちを抑え、無心になって作戦を実行する。

バッグの中には化粧ポーチとかヘアピンや輪ゴム（決してゴムではないw）、お店で使うものが綺麗にまとめて入れられている。底の敷き布の下に樹脂製の敷板がはめ込まれていて、その敷板の下で生地が折り返してある部分が、ちょうどレコーダーをすっぽり隠せる絶好の場所だった。これなら絶対にバレない。そう確信した瞬間、胸の奥がぞわぞわと熱くなりはじめた。

ただ一つ難点があったのだが、回収するときも再び仕込むときも、友美がバッグを使っていないタイミングしかない。

充電も定期的にしなければならない。

そこで既に頭が馬鹿になっている僕は近くの家電量販店でもう一つ同じボイスレコーダーを買ってしまったのだ。

こうすれば充電の手間も取り換えの手間も省けて一石二鳥だ。

ついでにスマホ時代にもうすっかりオワコン化したデジカメを友美にプレゼントすることにした。

友美には「このデジカメあげるよ、みんなで遊びに行くときに使えばいいんだよ。」友美は「サンキューこれ綺麗にとれるから助かるわ！」

このデジカメはもともと僕が仕事で使ってたもので一つ特徴がある。それは GPS が電源オフでも起動していることなのだが、友美はそのことを全く知らない。

そもそもスマホ同士で連携も考えたのだが、今のタイミングでは友美の浮気の状態を確認したい気持ちの方が勝り、あえてそれはしないことにした。

充電はスマホと同じように USB で直接充電できるのも、この作戦を続けるうえでは重要だった。

自分の嫁がほかの男にやられてるかもという禁断のタブーを想像するのがこんなにも

興奮するものなのかと頭がパニックになっている。

案外本当に黒崎は恵理那に気があって友美を出汁に使ってるだけかもしれない。

友美は友美で友達の恵理那にキューピット役を買って出ているだけなのかもしれない。

もしそうなら僕は人間をやめたくなるほどの賢者タイムが訪れるのではないかと少々ビビっているのもある。

普段は腰が重く行動力のない僕が、なぜか後先気にせずにどんどん実行に移せるというのも、すでにまだ寝取られたかどうかわからないのに寝取られという性癖にはまっていたからなのか？

僕はこんなことして後悔しないのか？僕は以前は友美の同僚の恵理那が首元が緩い服を着て胸の谷間をチラチラみせながら話しているだけで気持ちは恵理那に向かってしまいそうな時もあったが、今は友美が黒崎の話をしているだけで猛烈な嫉妬と興奮が心を覆う。

そんな準備をしているうちに僕は仕事に行く時間になった。友美のバッグにひそめたボイスレコーダーの電源も設定も何度も確認したのであとは今晚友美が仕事から帰ってきてからボイスレコーダーの入れ替えをして内容を確認するだけだ。

寝ている友美に行ってきますと言って仕事に向かった。

ふう、やっと仕事が終わった。

全く今日は仕事が手につかなかった。友美が僕より後に家を出て、仕事をしに行き僕の帰宅後に帰ってくるという行程なだけなのに。

ボイスレコーダーにはどんな言葉が記録されてるのか、果たして録音がされているのか、全てうまくいっているのだろうか？そもそもばれてないだろうか？

友美の勤務時間は早番が 9 時開店で 8 時 50 分出勤 間に休憩 1 時間 17 時 50 分退勤

遅番が 12 時 30 分出勤 間に休憩 1 時間 21 時閉店で 21 時 30 分退勤

そのほか不定休で週に 2 回休みがある。

今日はその遅番というやつで帰宅は 21 時半過ぎだ。

時々恵理那と晩御飯したり、モール内で働く他の友達とかでご飯や飲みに行ったりで帰ってくるのが遅くなったりすることもある。まあ飲みに行けば帰ってくるのは日が変わるのでその都度連絡がくる。

そうこうしているうちに電話が鳴る。

友美から着信だ「侑ちゃんこれから恵理那とご飯行ってくるから帰ってくるの少し遅くなるからね。先寝るなら寝てていいよ」

「そうかい、ご飯適当に済ませて先寝てるからゆっくり行ってきて」と僕はそんなふうに答えておく。

しかしながら僕の心の中は恵理那じゃなくて黒崎だろ！これから二人で何するつもりだ？？頼む！黒崎！犯してくれ！なんてとんでもない邪悪なことを心の中で考えていた。



一人で布団に入るが、どきどきと悶々とで全然寝れない。友美との写真をスマホで見返したり、時々友美に内緒で撮り貯めた友美の裸の写真をみながら黒崎というまだ見たことのない男にやられているところを想像していつの間にか自慰していた。

事が済むととんでもないことをしてしまった焦燥感と友美が本当に黒崎にやられてはいないかと心配になり心臓がドキドキバクバクして余計眠れなくなった。

恵理那と晩御飯っていつも近所のハンバーグ屋かファミレスと決まっているので少し車で通りがかりながら見てみることにした。が、さすがに友美と恵理那がいるのが確認できなかった。

どんな田舎町といってもさすがに全部の店回るには日が明けてしまう、田舎だけに距離も離れているので疲れてきたことだし諦めて寝ることにした。

夜の街を一周してきたことで、先ほどの自慰の罪悪感と賢者タイムは過ぎ去り気が付いたら朝になっていた。

横には普通に寝ている友美。何もなかったようにすやすや眠っている。

ハッと目覚めたのは僕で、さっそく昨日のボイスレコーダーの入れ替えに取り掛かる。底敷きの取り外しのコツがわかったので作業自体は簡単で全く問題ない。おそろく取り替えだけなら 30 秒もあればできると思う。しかしカバンの中の荷物を元通りに戻すのがちょっと大変。女の子のカバンの中なのできれいに整頓されている。それをきちんと元通りに戻すのが。

そしてここからが本題だ、友美は今日も遅番だ。これからボイスレコーダーの中身を聞いてみる。ずーっと僕は手が震えている心臓もバクバク血圧もきっと高いだろう。とにかく体中負担がかかっている感がすごい。

手がプルプル震えながらボイスレコーダーをパソコンにつなぐ。ファイルをクリックして再生…

ついにこの時が来たんだと。僕はすかさず友美が仕事終わってから恵理那と食事、本当は黒崎と SEX していたであろう時間帯を瞬時に予想し、おそろくご飯食べてお話し

てホテルに入るのは24時くらいだろうと。この地域は24時以降がラブホの料金が休憩から宿泊に変わって高くなるので24時のギリギリ手前に入室しているだろうと考え、24時過ぎたところに再生のシークバーを合わせてみた。

シークした位置からイヤホンの音にすべてを集中させる。胸の鼓動が邪魔をしてなのか何も聞こえない。

これはどういうことなのか？バッグの底に底敷きに敷かれて音声を拾えなかったのか？と残念感がよぎる。

何故だ！音拾わないのか？音量を上げてみるといきなりガチャン！っとドアを開ける大きな音が……こっこれは僕の音か、今朝起きた時の音だ、はっと目覚めてトイレに直行した時のリビングのドアの音だ。それにしても耳がつぶれそうなくらいうるさかった。

そうか、これは自動録音機能だから無音の部分が省かれてるのか。確かに朝5:50の時間を示している。てことはかなり手前にシークバーを戻してみる。

あっこれはいつものハンバーグ屋の音だ、声が聞こえる、恵理那の声だ。僕は必死になって黒崎という男の声を探しにかかる。が、20分ぐらい瞬きも唾も飲み込まず真剣に聞いていても男の声は聞こえない。何やら話の内容も掴めてきた。どうやら恵理那が黒崎のことを友美に話しているようだ。

途中からなので分からないから最初から聞いてみることにすると、恵理那が黒崎のことを一生懸命にお話している。相当気があるのだろう。

そんな中で車検の金額がいくらだったの？と友美に聞いている。友美は黒崎との約束を守ってなのか6万を10万ちょっとかなと大嘘をついていたのだが、恵理那は「友美さんそんなに高いの？って私9万ちょっとだったよ！」と勝ち誇ったように友美に捲し立てている。女として勝ったみたいに。

恵理那は3年落ちの可愛らしい軽四に乗っている。

前までステーションワゴンに乗ってたのだが、凍結路面で路外逸脱して廃車にしてい

る。その時の車だけを見れば皆それとは口をそろえて「死んだな」としか言えないような壊れ方だったそう。

ある意味見た目も中身も不死身の女なのかもしれない。そんな3年落ちの一回目の車検が9万ちょっとで友美より高いというのが、やはり黒崎は友美が本命かと、僕にとってすごい気がかりになってしまう。

その後恵理那は黒崎の話ばかりしている。アイスホッケーの選手でとか、もうそれは自分の彼氏のように。

僕もなんか昨夜の自慰とか、ホント酷いことをしてしまい情けなくて仕方なくなってきた。

ボイスレコーダー高いやつ2個も買って僕は何をしてるんだか……

とりあえず今日は昨日の分もキチンと仕事しよう。そう言い聞かせてまだ寝ている友美の寝顔に行ってきますと言って職場に向かう。そのあと仕事に「もしかして黒崎と休憩中に接触しているかもしれない」とか、寝取られ発作としか言いようのない良からぬことを考えたりもする。さっさと家帰ってボイスレコーダーを確認しようと思

い仕事を適当に終わらせる。

黒崎は両方狙っているのかそれとも女の嫉妬をうまく利用しようとして友美を狙っているのか。

それともただ自らの営業成績を伸ばそうとしているだけなのか。いったいどういうことなのか僕自身では結論づけることができなくなっていた。

### 第三章 楽しい湖水浴

あのあとから2か月近く経っただろうか、もう7月だ。

毎日毎日作業のようにボイスレコーダーを回収しては満充電のボイスレコーダーと入れ替えをしていた。最初は丁寧に内容も確認していたのだが全くエロい話や浮かれた話なんかまったくない。

僕は録音の中身について、友美のことが気になっていて他のことには全く興味がない。

だから面倒で飛ばし気味に聞いている状況だ。

友美のトートバッグはショップの奥のストックルームに仕舞い込まれていることが多い。

せいぜい良くて恵理那が黒崎とのノロケ話をしているぐらいで、殆どは休憩中の雑音しか聞こえない。

家の中のテレビの音や通勤時間に休憩時間とそのほかの雑音、これをすべて追いかけるだけで毎日3時間も4時間もかかってしまう。

僕的には、友美が休みの日の録音は重点的に聞こうとは思っているのだが、1 日中の録音を全て聞くとすると 10 時間とか PC の前でヘッドフォン被って頑張らなければならない。友美は僕が楽器屋の従業員だから、音楽の仕事しているんだなと思って何の疑いもしないが、なかなか切ないものである。

黒崎は車のディーラー勤務、友美や恵理那と同じく平日休みなので 3 人休みを合わせやすく、ここ最近は 3 人でお出かけすることが多くなった。友美は恵理那のキュービット役として積極的に参加してあげてるそうだ。

録音もそんな感じな会話しかないので、黒崎とは今まで何もないし、これからも何もないだろうと整理がついていた。

とある休みの日の一幕だ、一応 3 人でそろっている録音は期待もせずに聞く。ただの人間関係を客観的に聞くというのもスケベ心を抜きにしても面白い。非常に趣味は悪いのだが。



それは黒崎と恵理那のドライブに友美もお邪魔していた時の録音。

この田舎は夏でもほとんど暑い日になることはなく、海なんかに行っても波が高く泳げるところなんてないので、我々田舎者は真夏になると、こぞって山奥にある砂湯という温泉が湧く湖に海水浴ならぬ湖水浴に行くのだ。

まさか砂湯なんか行くとは思わなかったので、友美が水着になるのかと思うとドキドキしてきた。

友美は極力露出は避ける女で恵理那とは逆だ。一応恵理那と同じくワンピースやミニスカートも職業柄履くことは履くのだが首元にボタンがあれば一番上まで閉めたり、スカートの脚の閉りは恵理那と違って遥かにガードが堅い。

そんな友美の水着って、うちにある水着は僕と新婚旅行でハワイに行った時のビキニと北南の海水浴場に行ったときに海水浴場で半額で売れ残っていたタンキニの2着しか持っていないはずだ。

当時、友達グループと一緒にたまたま立ち寄った北南という道の駅併設の海水浴場で、ビーチに行ってみようぜってことになりみんなで海の家売店で水着を買ったのだ。

友美は身長が 170cm と巨大な女なのでなかなかマッチする水着がない。

半額で売れ残ってた超オバハン系の水着で嫌だったみたいだが、友達とのせっかくの雰囲気壊したくなかったので仕方なくそれを買った。

地味というか少しダサイタンキニなのだが、タンクトップを脱いだら感心するほどドエロイかなりきわどいタンキニだった。タンクトップを脱ぐなんてことはまずないと思うが、脱がなければ何事もなく、イモねちゃんの称号が際立つ水着で何も問題ないとおもわれる。

その時の録音を再生してみる。その日はこの地域ではまれにみる猛暑だった。

友美「湖ホント暑かったね、日焼け止め塗っても日焼けしたよ」

恵理那「友美さんタンクトップ脱いでたじゃん！」

帰ってきて気が付いたのだが、かなり際どい水着のラインがくっきりわかるぐらい日

焼けの跡が残っている。

友美「だってあついんだもん！恵理那と黒崎くんが沖の方へ行ったから私はパラソルの下で涼んでただけだよ」

恵理那「黒崎さんジーっと見てたわよ、鼻の下伸ばして！べろーんとねw」

黒崎「いや、見てないですよ、ぼ、ぼ、ぼくは・・・」

黒崎は今ここで言うなよって雰囲気を醸し出す。

友美少しムツとしながら「はあ？見たの？」「変態！」「損害賠償だ！金払え！」

黒崎「何すか！その損害賠償って！」「怖わーや○ザやん！」

全員「大笑い」

そんな帰り道にたわいもない話で楽しいひとときが過ぎていたのだが、

友美が「ちょっとそこの道の駅寄って」

「3番かい？」恵理那が聞く。

(3 番＝お花摘み＝トイレ　お店用語)

友美「いっや！恵理那ったらそういう言いかたしない！お店じゃないんだから」「ちょっと花摘んでくるね」

友美は基本男性の前では、はしたないことが嫌いなので少し怒り気味だ。

友美はそう言ってバッグの中からガサゴソとお財布と思われるが何かを取り出して車から降りて道の駅のトイレへと消えていった。

車内は黒崎と恵理那で二人っきりになった。

「賢は友美さんのお尻ばかり見てたでしょ！それとも胸？」

「ゴメン、正直見てた！友美さんすっげえスタイルいいよね」

黒崎の話を遮るように「はいはいボクちゃん良かったでちゅね！でもねえ、友美はモリマンだよ！」

恵理那は半笑いしながら友美を酷くディスりつつ完全に嫉妬している。

それでも黒崎は「ホントすごい盛りあがってた！顔埋めたいくらい盛ってる！」と恵理那の気持ちを踏みにじるように発言を続けている。

恵理那は「友美さんはなんかいつもずるいのよ。控えめだし、いい人だし。美人だし、スタイルもいいし」

「悔しいのよ。いつも直前でみんな友美が持っていくのよ。賢も友美さんのこと好きなんでしょ？」

やはり友美との何かの軋轢みたいなのがあるのかな？社員と契約社員という社内カー  
ストとかが原因か？

分かりやすく黒崎が「そんなことないよ！オレは恵理那の方が好きだよ」なんて抜かす。

恵理那は怒って「本当のこと言いなさいよ、顔に出てるわよ！」

「言っておくけど、近藤さんは旦那さんがいるんだからね！」恵理那は手段を選ばず  
ゲームチェンジを試みるが不発なようだ。

それでも恵理那は必死だ、男だけは友美に負けたくないという意地とプライドが音声  
だけで伝わってくる。

恵理那「じゃあなんで私と付き合ってくれないの？どうして？身体だけ？なに？どう  
いうこと？待ってるのに……」

黒崎は恵理那の猛攻撃になす術無しだ。

黒崎は「……」沈黙している。

沈黙してたのか唇をふさいでたのかは録音では分からない。

数分の沈黙の後に友美が帰ってきた。

友美「ただいま！」「山田農園のチーズ買ってきた。みんなで食べてみよ！」

今までの神妙な二人の会話を確実にぶち壊して、友美が車に戻るまでの険悪な雰囲気はどこかへ行ってしまったようだ。

その後3人は黒崎のお部屋立ち寄ってそこでまたお話を始まった。

黒崎「友美さんベッドの上に座っていいよ、俺と恵理那はコタツに座ってるから。」

友美「ここ座っていいの？ベッドだよ」

何故か恵理那が出しゃばって「いいのいいの、ソファー無いから足痛くなるから友美

さん座っていいよ。ワンルームで狭くてなんもなくてごめんね」と自分の家のような  
感じで恵理那が謝っている。

その後、また話が盛り上がり、表向き 3 人の絆は最高潮になっている。

この前のゴルフで一緒に回って友美の写真ばかり撮ってた黒崎のスケベなお客さん  
との話や、恵理那がそのスケベなお客さんと飲みに行って、夜のバイト先のニューク  
ラブに同伴で強引に引っ張り込んだとか。

さらに恵理那はそこでシャンパンを入れさせたとか。

恵理那の豪快な武勇伝に「これが本当の 19 番エリナホールだね」と友美が下衆なオヤ  
ジギャグ的な落ちをぶつけて大笑いの大盛り上がりをしていたようだった。

そして 18 時を過ぎて友美が二人の空気を読んで「そろそろ帰るね」といって黒崎と恵  
理那が「まだゆっくりしてってよ」と引き留める。

友美「今日は疲れたし人妻だし侑ちゃん待ってるから家帰ってご飯支度するね」

黒崎「車で送りますよ」と、友美は「歩いて 5 分で家着くから大丈夫よ」と即答す

る。

黒崎と恵理那が「じゃあまた遊ぼうね～」というので友美は「またね」と言って帰路に就く。

友美は家路を辿りトコトコリズムよく歩いている。うん、いつもの友美の足音だ。

そんなたわいもない話をしながら 19 時頃に帰宅、黒崎のお家に恵理那を残して友美が先に帰るという形で帰ってきている。友美は「恵理那と黒崎はそろそろ付き合うんじゃないかな？そろそろ私ついていかなくてもいいんじゃないかな」と。

黒崎の話を以前のように嬉しそうな声で話すようなことはなくなっていた。

僕は、黒崎と恵理那はすでにカップルみたいになってて、友美はすでに黒崎のことなど眼中になさそうだった。

僕も脈無しだと諦めていて、こんなことをしている自分が本気でバカらしく気持ち悪く思っていた。



## 第四章 足音

さらに時は経ち北の方から紅葉の便りが聞こえてくる季節になってきた。時はすでに10月である。

期待を裏切るようで申し訳ないのだが、相変わらず友美の浮いた話とかは全く聞こえてこない。

正直心底どうでもよくなってきたのだが、これはスケベ心の波と言えればいいのだろう  
か寝取られの病の一部なのか、「もう聞かなくてもいいや！」と思っけていても、気分が  
変わって寂しくなってくると、友美のプライベートの扉を開けてしまう。

僕はどうしようもないバカ夫だ。

そんな感じで超飛ばし気味ではあるが、相変わらず儀式のようにボイスレコーダーを  
聞いている。

黒崎はもうオワコンと考えて、もしかして他の男とかに声かけられていないのかと淡  
い期待をこめて。

妻とはいえ盗聴まがいなことしている趣味の悪い自分に何とも言えない罪悪感を感じ

ながら。

ボイスレコーダーの検証作業は、友美が仕事に行って家にいない休日の時に一人でゆっくり行っている。僕はこの作業のみで休日を費やし掃除とか洗濯とかやることもた  
くさんあるのにそっちのけで。

全く生産性のない一日である。

こんな感じで「侑ちゃん洗濯しなかったの？」とお叱りに似た質問を受けるのが嫌で  
一応洗濯機は回しておく。

なんかタンガミみたいな下着が数枚混ざっていたのが気になったのだが、まあ友美は服  
屋だし、たまにTバックとかも履くこともあるんだろうと思いあまり不思議にとは思  
わなかった。

今回の録音は先々週、職場の同僚（恵理那も含む）たちと居酒屋で飲みの後カラオケ  
に行くと言って友美が久しぶりに朝帰りした時の物で、一番ここ最近で気になってた  
ものである。

まずはその時の状況を思い出してみる。

僕も正直、人妻であろう友美が、朝まで遊びに行っているという事が、寝取られを望んでいるのにもかかわらず、どこか腑に落ちない。まあ恵理那とか店長とかお店のお姉さまたちとのカラオケとか飲み会はエグイから仕方ないとも思っていて、そこはあえて何も言わないようにすることが夫婦の暗黙のルールとも思っている。

そんな気持ちが頭の片隅にあるからが故、眠りは浅く、必ず友美の帰宅の足音で目が覚める。

朝6時過ぎ、「カコン、カコン、カコン、ッカコン、カカコン」我が家の旗竿地の路地を歩く足音が聞こえる。ヒールを履いた友美の足音だが、珍しく酔っぱらってるのだろうか？なんかいつもと違う音だ。足を挫いたのか歩き方がおかしかった。それにはある訳があったからだ、後で気づかされることになる。

僕はすかさず家の窓からバレない様に友美を眺める。妙に色っぽく見えたのは気のせいだろうか。化粧もバッチリ決めて。とっくに明るくなってるとはいえ、もう 10 月で寒いので服装はトレンチコートを着ているのだが、ミニワンピースになぜか素足、生足だ。友美は身長が 170cm と巨大な女なので、ミニワンピースに黒ストッキングは圧巻なのだが、なぜか素足。色白なのでそれはそれでいいのだが。

友美が玄関を開ける前にそそくさと寝室に戻り寝たふりをする。

寝たふりをしたつもりだったが、友美の朝帰りに付き合っただけで半分起きていたため、帰ってきたと同時に安堵したのか急に眠気が強烈に襲い、気が付けば眠ってしまっていた。

その後仕事も忙しくなり、データの移し替えだけは行っていた。

普段はお互い平日バラバラの休みなのでなかなか休みが合わず、ボイスレコーダーの検証も容易にできていた。

最近は友美と休みが同じ日が続いたので、なかなかいない時間帯に録音の検証をする

ことができずにいた。

2週間ほど経って、やっと時間ができたので録りためてた記録を検証してみることにした。もしかしてムフフなことしてないだろうかという事を猛烈に期待して。

あの時の友美の素足が妙に気になって、まさかとは思ったが、なんとなく、まずは適当に世の中のカップルが一番Hな事をしていそうな時間帯（夜中の24時くらい？）を狙ってシークバーを移動してみる。

ん？「泣き声？が聞こえる？？……恵理那か？……何が起きたんだ？……すごい録音が入ったぞ！！」と高みの見物で今どきのボイスレコーダーの威力に感服していたのだが、この甲高い泣き声を発しているのは「恵理那じゃなく……………」

先入観で勝手にHな声だと思っていたら全然違った、恵理那のムフフな声でもない。

ただ友美が何故か泣いている、「わかんないって、もうわかんない！」と叫びながら嗚咽を伴っている。

僕は友美が、本来は期待していた SEX をしてたわけではないことに安堵したのだが、その後から「友美を泣かせたのは誰なんだ？！恵理那か？それとも店長か？」と怒りが沸々と湧いてきた。いや、そんなことはないか、泣かせるようなことする奴はオレの知らない別の男か？いややっぱり黒崎か？黒崎と考えるのが普通だよな。もし黒崎だとしたら？黒崎は何をしたんだ？と・・・・・・・・

友美の泣き声を聴くのは旦那として痛々しくて聞いていられないのと、黒崎が友美を泣かせた原因を探って黒崎に少しお灸を据えてやろうと思ったので、シークバーを最初に戻して聞いてみることにした。

録音の最初はまだ朝で、まだ家の中だったので少しずつシークバーを進めていく。友美がお店で働いている雑音がする。もう少し進めてみると恵理那と、店のストックルームの中で話している。

「友美さんと二人で行ってきてよ！私あの男ともう会いたくないからさ！」と、いきなり奇抜な事を恵理那は言い始める。

友美は驚いた声で「え？ どういうこと？ 半同棲みたいな感じだったじゃん」

「え？ 友美さんも気づいてた？」と何食わぬ顔してとぼけている。

「何その言い方、私じゃなくても誰でも気づくわよw」またこの子は私を小バかにしてって感じで答える。

「なんか男らしくなくてね、パツとしないのよ！ 付き合ってるわけじゃないのに避妊しないし！」

友美はそんなカップルの夜の話なんて聞きたくない風な反応で「ちょっとそういう話は私にはよくわかりません・・・・・・」と答えた。

友美は少し黙って答えた「それより、もう一時間後（19時）には予約の時間だし、先週も恵理那が急に夜の仕事入ったからって断ったばかりじゃない。今日はさすがにお店に失礼だし悪いから行こうよ！ それか誰か代役立ててよ」

焦りまくってる友美の声に恵理那は、「さっき店長にもお願いしたら、は？ って言われて怖かったから無理だった。お金払うからから二人で行ってきてよ！ お願い！」とめちゃくちゃな事を言い出すくらいに黒崎には会いたくないみたいだ。

友美「恵理那行かないの？ えー？ それに店長は遅番なのに飲みに行ったら店誰閉めるの

さ？それは怒るよ！」

「てゆうか私と黒崎くんと何でサシで？？なんか面倒なことになりそうで嫌だなあ。

うちの侑くんには余計なこと言わないでよ！」

焦ってるのか友美の口数が多くなっていて、物凄い早口になっている。

恵理那「今日はゴメンナサイッ！」「もう無理なの！あの人。」

友美は何で喧嘩しちゃったの？という感じで「何言ってるの？私は恵理那と黒崎くんが仲直りするようにお願いしに行くだけだからね」恵理那に強く念を押している。

そういう事か、やっぱり黒崎なのか。

恵理那思いの友美は黒崎と恵理那がよりを戻すようにお願いしてて、黒崎がわかってくれないから泣き出したんだな。

僕なんとなく理解した。



友美の同級生から結婚式の時に聞いたのだけど、中学生のときその同級生が告白して断られたそうなのだが、何故か振られた同級生ではなく、友美の方が泣いてしまうという優しい女の子だったそう。

まあ、友美は元生徒会長でお世話好きというかおせっかい焼きなところもあるからなあ、わざわざ二人っきりで話し合いなんかしに行かなくたっていいのに。

友美は職場を後にして一度帰宅したようだ。

足早にシャワーを浴びたり支度をしてバスに乗り込む。忙しそう。

恵理那はタクシー代くらい前もって友美に渡せよ！そういうところなんだよと思った。

## 第五章 あっという間に

カコンカコンとリズムよく歩く音が聞こえる。やがて録音は飲食店の中に変わっていた。

黒崎「お疲れさま」という、友美も「お疲れさまです」といってグラスのぶつかる音が聞こえる。

「恵理那となんかあったんですか？」何故か友美は敬語で話す。

僕たちはいつもタメ語で話す普通の夫婦なので、友美の敬語はすごく新鮮で寝取られ好きの僕は凄く興奮する。ましてや男性と二人っきりだ。

「なんもないよ、たださ、俺が友美さんのことを好きなんだろう？って恵理那が怒ってさ。」

「はあ？何だそれ??」甲高い声でびっくりしている。

「まあ事実だから仕方ないよ」と男らしい声で間接的に友美に告白して反応を見ている。

「何言ってるんですか？変なこと言わないでください。二人カップルで同棲し始めて

たんじゃなかったんですか？」と真剣に聞く。

「ほぼそれに近かったというか、でも付き合っていないんだよ。ずっと恵理那がうちに泊まってたんだけど、でも先週から恵理那はもう来てないんだ」と答えているが、全く寂しさは感じられない。

「そうなんですか、私、恵理那からは何もきいてないのよ、てことは付き合っていないけど突っついたのね？」友美はまたひどいブラックなジョークを入れている。

黒崎はひとたまりもなさそうに「付き合ってません！」といい、「え？突っついたの？」「責任持ちなさいよ！」と友美はずるそうな声で畳み込んでいる。(タイプのこういうこと言う女ではないのだが、恵理那のためキャラクター替えてまで相当頑張っているのではと思う)

防戦一方の黒崎はすかさず話題をすり替えてきた「そうだ恵理那の荷物うちにあるんだけど丁度良い、ついでで悪いんだけど今日持ってってもらえるかな？また会おうとあれでしょ、恵理那気が強いからまた修羅場になりそうだし」

「今日お酒飲んじゃったので、今度そのうち車で取りに行きます」友美はコイツの家は危険と察知したんだろう即断った。

「それでもいいよ助かる！今日はドンドン飲んで食べてやっちゃいましょう！」

「黒崎くん、いろいろ大変だったんだんですから私に構わず飲んでください！」

「じゃあやっちゃいましょう！2回目だけど、カンパイ！」

なんかやっちゃいましょうって黒崎の言葉が気に入らなかったが、再び二人で乾杯をしている。

黒崎は、やはり車の営業職だ、知り合いがたくさんいるのかここまでの録音の中にも2～3人に挨拶されているのが分かった。どこかのおじさんが「黒ちゃん今日はすごい別嬪さんと一緒だね、彼女さんかい？」

黒崎「いやあまだそんなんでも」とのろけている。

僕は、まだそんなんでもって言い草が、恵理那を食い散らかしてから友美に照準を合わせるといふ狡い作戦が気に食わなくてしかたなかった。

でも、友美はアパレルショップ店員なので一応美人なほうではあるけど、人に自慢できるほどの美人とは思ってはいなかったが、こうして録音を聞くと男受けが良い女だと改めて思い知らされる。その優越感がまた胸と股間を熱くさせるのだが、そんな録

音の中で、友美は恵理那との復縁を真剣にお願いしに黒崎と差しで飲みに来たんだと、変に納得をしてしまったのだ。

その後、黒崎は相当お酒が回ってきたようだ、黒崎は必死に友美を口説いている。友美はザルなので全く酔っていないと思う。でも必死に友美を褒めているのだが、友美はいつまでも敬語で答え、話の内容も恵理那との復縁の話で黒崎の話とはまるで食い違っている。

それでも黒崎に「今日のワンピースかわいいね。すごい似合ってるよ。」褒められると。

友美は「そんなことないですよ、これ仕事着ですから。それに私、誰にもそんなこと言われたことないです」と無機質に敬語で答える友美。でも満更でもなさそうだ。そこが乙女心ってものなのか。

そこで黒崎は少し博打にでて「オレ黒のパンストフェチなんすよ」

友美「・・・・・・・・」多分ムツとした顔してたんだと思う。

「いや、脚長いから似合うなってことですよ！」黒崎は友美の冷たい間合いに確実に焦っているようで、すかさず話題を替える。「旦那には言われてるでしょ、どうやって付き合ったの？羨ましいな〜」

友美が嬉しそうに「うちの旦那ね。私が好きで告白したんです。あの人音楽家で、チェロとかピアノとかギターとかあとクラリネットとかトロンボーンとかなんでも楽器を奏くのが格好良くて」

黒崎は面白くなさそうに、のろける友美に「へえそうなんだ、オレはアイスホッケーとサッカーとかスポーツ全般だから全く合わなさそうだな」

友美は黒崎に合わせるって気づかいは全くなく「そうですね、うちの旦那と黒崎くんとはタイプは全く違うと思いますけど、でもスポーツする人素敵じゃないですか。」

「友美さんはスポーツは？」と黒崎は得意分野の話に持ち込もうとする。

友美は「私は中学の時にソフトボールしてたけど、それから特に何もしてないよ、恵理那はバドミントンとかやってたみたいよ」

黒崎は恵理那を無視して「じゃあ友美さん、今度僕とバッティングセンター行こうよ」と軽く誘うが、

友美は「恵理那と一緒になら行くよ、でも私の得意分野で誘っても恵理那喜ばないと思

うから没だね」と即却下する。

黒崎は残念がって「じゃあ友美さんはどうすれば僕とデートしてくれるの？」と必死に食らいつくが、友美は「私は旦那がいるし今もラブラブだから無理よ」と厚い壁を立てて拒絶した。

友美がこんな寝取られ好きな馬鹿な男を愛してくれているのにはホント感謝しかない。僕はなんか正気に戻り寝取られなんかバカ臭くなってきて早く友美は家に帰れよと思い始めてきた。

友美は友美で黒崎に対して、友美が要所要所で恵理那の話題を挟もうとするが、まったく無視して友美を口説き続ける。そんな感じで分かってくれないから友美も相当イライラしてたんだろう。

しかし、黒崎は友美と二人っきりになったら凄い猛攻撃だ。友美は身持ちが堅いタイプだから適当にあしらってるけど、基本危ない男だな。

僕はすっかり正気を取り戻し紳士になっている。

自分的には黒崎は恵理那の次はその友達の人妻の友美を食い散らかそうと、いくら若いとはいえ同じモール内で働いているのに少しイタイ男だなあ、と。

宴もたけなわとなり、「きょうは楽しかったよ」と黒崎が言う。「お金はさっきトイレ行くとき払ってきたから今回はおごらせてください」恵理那が男らしくない言っていたが、友美には男らしい振る舞いをしている。

「じゃあ、私ここでタクシー呼んで帰りますから」というと、「同じ方向だし近所だから、恵理那の荷物もあるし家までの分払うから一緒にタクシー乗って帰ろ？」と黒崎も友美のことは諦めたのかおかしなことは言っていない。

友美もこのご時世田舎はタクシー捕まらないのもあったのか納得して「まあ、恵理那の荷物もあるし、私の家、黒崎くんのところから歩きで5分のところだから乗っていきますよ。タクシー代は私が支払いますね、そこでタクシー待っててもらって荷物だけもらって帰りますわ」とのこととなった。

黒崎は最後の飲みきれず友美が残した日本酒を「じゃあ勿体ないんでオレ飲みますね」と一気飲みした。



タクシーに乗り込んだ二人、黒崎がいきなり冗談とも本気ともとれる声で「新西町のラブホで！」

タクシードライバーは「新西町なら自由の女神でいいのかな？」

即座に「そんなところ行きません、黒崎くんの家行かないなら私の家にまっすぐ行ってもらいますよ！」

友美が結構な勢いで怒っている。

急にヘラヘラした口調で「ゴメンゴメンそれは冗談で、自由が丘3丁目のコンビニから右に曲がって二件目のリバティーヒルズです」

タクシードライバー「わかりました」と無機質に応じる。

「運転手さん、そこで5分くらい待って欲しいんですよ。友達の荷物預かってますのでそれ取ってきます。5分かからないと思います」

タクシードライバー「分かりました。止まってる間も料金かかるけどよろしいですか？」

「大丈夫です、そのあとすぐ近くなんですけど夕陽が丘2丁目に行って欲しいんで

す」

タクシードライバー「大丈夫ですよ、女の子は夜危ないからね近くても乗っていった方がいいですよ」

「よろしくお願いします」

恵理那思いの友美はそんな面倒な願いをしてた。

それから 20 分位走っただろうか、二人とも静かだなと思ったら、黒崎のマンションの前で友美が「黒崎くん起きて！」と何やら叫んでる。タクシーの中で黒崎は寝てしまったのだ。

こうなったら何をしても起きない。飲みすぎたのか吐きそうになってる。黒崎が「友美さんすみません」と謝ってる。

タクシーのドライバーは酔っ払いが相当嫌いらしく乗った時と今とでは全く態度が違う。「道路とかで寝られて跳ねられたりする人いるので、お客さんの方で家まで責任もって送り届けて下さい」と強い声で友美に言う。

友美は黒崎を送り届けるのに「少し待っていただけませんか、5分位」と当初の約束  
をお願いするも、

タクシードライバーが「チッ」っと軽く舌打ちの音が聞こえ「いやいやこんなに酔っ  
ぱらってたんじゃあ5分や10分の話じゃないでしょう、私他にも回らないとならな  
いので、そのあと必要であればまた呼んでください」と無茶なことをいう。

「申し訳ございません。わかりました。支払い電子マネーをお願いします」

その場でタッチ決済の音が聞こえる、

友美は仕方なさそうな声で「黒崎くん行くよ！無理して日本酒全部飲むんだから……

大丈夫？」「この子ちっちゃいけどホント重たいなあ」

酔っぱらった黒崎は友美にとっては少し重たい子供のように見えてたのかもしれな  
い。母性本能ってやつか。黒崎はぶっ潰れているけど、僕は少しもやもやする思いだ  
った。

友美は黒崎を介抱しながら、「今日は黒崎くん具合悪いし荷物は今度また取りに来るか  
ら私帰るね。」と黒崎に言い聞かせながら友美は「部屋の鍵開けて」と黒崎にいう。

黒崎は相当具合悪そうに必死の懇願で「これ鍵です開けてくださいと、友美に部屋の  
カギを託す」

そしてガチャガチャと鍵とドアを開けて二人が家の中に入り、ドアがガチャンと閉ま  
る音が印象的に響いた。

友美が「仕方ない子ね、ほれ坊や、ほら家着いたよ、もういいでしょ！」

黒崎が玄関先で倒れ込んだようだ。

「イヤイヤイヤ・・・」「ちょっと立って黒崎くん！こっちだよ！」と・・・

そして友美は黒崎を抱き起して二人は黒崎の部屋へ入っていく。

なんか僕は当初、黒崎との話し合いに「二人で男の部屋は危なくね？」友美ったらホ  
ントおせっかい焼きのお嬢様なんだから。と呆れてしまった。

まあ、ここで恵理那とより戻す戻さないで黒崎が分からず屋を極めたから友美を泣か  
すことになるんだな。

酔いがさめるまでそばにいたのか？とか想像だけでは分からないので、録音を真剣に一字一句を拾い続けている。

僕はさすがに男の家に女一人はさすがに危なくない？でも黒崎は潰れてるから大丈夫か、寝取られなんかすっかり忘れてる。友美の心配のみでドキドキもしていない。

友美は「何かあったら自分で119番してね」とベッドの上に黒崎を服着たまんま「ドッサッ！」っと黒崎を寝せたつもりが黒崎の手が友美の腰に回っていて友美まで一緒によろけてベッドに寝転んだようだ。

友美は黒崎と一緒にベッドに倒れ込んで相変わらずの口癖の「イヤイヤイヤ・・・」と苦笑いしながら「いたた、ちょっと離してよw」「黒崎くん重たいよ」よしよしと介抱して「はい離れてね、どけてね」と言っ

「何してるの？黒崎くん、早く寝るんだよ」と友美の必死な声が聞こえつつ「嫌だっ  
て間違ってるって！」と言った瞬間、「友美！好きだ！」と男らしい声で・・・・・・・・  
チュッチュ！ペロッチュ！」という卑猥な音が響く。

僕は「は???」「黒崎何考えてるんだ？」

現実を受け止められないそんな思いとは裏腹に、僕の寝取られ性癖が正気に戻っていたはずの僕の心に一瞬にして呼び戻され股間が今までにないくらいはち切れん程に大きくなっていた。

お付き合いいただきありがとうございました。体験版はここまでとなります。

この先友美はどうなってしまうのか、あなたの周りにもこういう断るの苦手な女性はいませんか？もしかしたらあなたのパートナーもそうかもしれません。

人間の世界は知らなくても良いことが、いえ、知らない方が良いことがたくさんありますよね。

ボイスレコーダー一つの中に見たことのない世界が広がっているのかもしれません。

それは綺麗なお花畑か、それとも光一つない前に進んでるのか後ろへ下がっているのさえ分からない闇の世界なのか・・・・・・ それでは本編でお会いしましょう！